# 祭りを通してみる社町の地域性

浅川　葉木

**キーワード**:祭り，伝統文化，人口，神社，「語り手」・「聞き手」，社町

## 1. はじめに

本研究では、社町の神社にかかわる祭りを取り上げて、それに関わる人の構成に着目し、社町の祭りがいかにして伝統文化として受け継がれているかという実態を明らかにするとともに社町の地域性を明らかにすることを目的とする。

社町には数多くの神社があり、人々が神社を中心に心を寄せ合って生活していたと推測される。また、決まった時期になると老若男女、様々な人が祭りに関わって祭りを盛り上げているようにみえた。このような伝統的な祭りが多く残る地域の特徴に着目し、社町は伝統的な文化を伝承している地域ではないかという仮説が浮かんだ。伝承活動が具体的に展開する要件としては、「語り手」と「聞き手」が必要であり、その話の内容では、面白さ、知的興味、興奮などとともに、経験や体験に基づく「共感」が重要なものとなるのである。（佐藤，1982)。社町に住む人が「聞き手」と「語り手」の役割を担って祭りを行っていることを明らかにすることを通じて、祭りという伝統文化伝承のメカニズムを示すことができるのではないかと考えた。

研究方法としては、文化を生み出し、伝承する基盤である人に着目し、それを人口に関するデータをもとに考察する。また祭りや伝統文化に関する先行研究から本研究で扱う祭りの定義づけをし、祭りの分類を行なう。人口推移、人口構造、祭りの考察をもとに、具体的に事例地域を選択して、そこでの祭りを構成する人に焦点をあてた祭りの分析を行なう。これらの考察を通じて社町に残る祭りから社町の特徴を見い出す。また、本研究で得られた知見をもとにこれからどのような祭りが社町に適しているのか、聞き取り調査を含めたフィールドワークをもとに、社町の実態に即した祭りのあり方を提示できるようにする。

## 2. 社町における伝統文化伝承形態

### (1) 社町の神社

社町には数多くの神社がある（表1)。まず、鎮座地に注目するとほとんどの地区に神社があることがわかる。総数は60になる。中には一つの地区に多くの神社をもっている地域もある。これだけ多くの神社があるということは社町の住民にとって神社が近い存在であることがいえ、神社そのものが社町を表すものになっている。

### (2) 人口動向

社町 40 地区別の人口に目を向けてみると地区によって人口増減の差のあることが分かった（図1)。そこで、1960年の人口を基準に2002年の段階で20%増加している地区を増加地区、20%以上減少している地区を減少地区、人口増減が20%以内の地区を一定地区とし、分類した。

パターンの中で最も多いものが一定地区17地区、続いて減少地区13地区、増加地区10地区となっている。一定地区・減少地区に関しては推移のしかたが滑らかなことから増減に大きな変化がなかったといえる。すなわち社会増減があまりないと推測される。一方増

加地区は新しい地区の誕生や町の発展と共に人口が増加しており、社会増減があるといえる。社会増減がある地区とない地区ではそこに暮らす人の構造にも違いが出てくると考えられ、それにともなって伝統文化の伝承形態にも違いがあると考えられる。特に新住民が多く流入する地域では新住民による多様な価値観が入ってくると考えられ伝統文化の伝承形態に変化があると考える。

そこで本研究では、家原地区を取り上げる。家原地区は社町の西側に位置し、地区内に県営・町営団地などの新住民が暮らす場所が存在する。家原の新・旧住民の割合は、ほぼ同数である。このことから人口の出入りがある地域といえる。また家原地区は社町を代表する佐保神社に近く、古くからの習慣が現在でも行われている地域である。佐保神社は社町の神社の中で最も有名なもので町名の由来にもなった神社である。佐保神社に関してはその氏子圏も広域にわたっており、社町の他の神社とは違った特性である。

(3)「まつり」と「祭礼」

先行研究をもとに祭りを「まつり」と「祭礼」に分けた。「まつり」とは日常の結束をより固くするために行われるものである。「祭礼」とは日常生活では味わえない楽しみを「祭礼」を通して実感し、そこに集まる集団と共有するものである。

祭りの数は「まつり」の方が圧倒的に多く、「祭礼」は限られた神社で1回か2回程度である。どのようなものが「祭礼」に変化したかについては、各地の祭礼の内容が様々であることからもわかるように、地域によって様々である。見物人に関しては「まつり」は無しであるのに対し、「祭礼」は見物人でにぎわう。ここが「まつり」と「祭礼」の大きな違いである。祭りの規模も「祭礼」の方が大きく豪華であるし、祭りの道具も「祭礼」の方が多くの装飾品をつけた華やかなものである。これもすべては、見物人という立場の人がいるためである。人に見られると必然的に良く見てもらおうとする。また、もっと見てもらおうとして派手にしたり、大げさにしたりするのである。「祭礼」が成立するには見物人の存在がとても重要なのである。見物人として祭りに関わることで祭りが広域に広まり、見物人が新たな見物人を呼び祭りの場には多くの人が存在し、「祭礼」へと変化する。祭りを少ない人数でするということは、誰もが祭りの主体であり、見る・見られるの関係ではなくなる。また、祭りの発生場所として「祭礼」は都市で発生すると示されている。もとから人が多く行き交う都市では人が集まりやすい要素が集まっており、見物人としての関わりが可能といえる。

(4) 家原地区の祭りと佐保神社の秋祭り

本研究では「まつり」と「祭礼」の事例として、それぞれ家原地区の祭りと佐保神社の秋祭りを取り上げて考察した。

家原地区では「お頭」と呼ばれる家原地区にある神祠の祭りに際して、神事に関する諸行事を執行したり、神職をたすけて供饌や饗応をする役がある。これに関わる人は家原地区の祭りに参加することになる。しかし、お頭をするのは旧住民のみで新住民の加入は皆無である(図2)。家原地区で行われる祭りをみてみると祭りは一年を通して行われており、人の生活と神社との関係が近いことを表している。中でも春と秋の宮だちは盛大に行われる。お頭の仕事もこの2つの宮立ちを中心に行われている。また家原地区の祭りには見物人がいない。見に来るぐらいの大きな祭りではないため、周辺の人々も祭りがあることを知らない。そして、根本的に見せるために祭りをしているのではないということである。祭りを行う人は自分達の生活をよくするため、災いから守ってもらうために祭りを行うわけであるから、見物人の存在は必要ないのである。このように家原地区において行われている祭りでは、祭りを通して家原地区の地区としての集団形成がなされておらず、地区と

しての一体感が薄れつつある。つまり、地区構成である新住民の参加がないために新住民が「聞き手」、旧住民が「語り手」という役割分担がなされておらず、旧住民の中だけで完結している。

佐保神社の秋祭りは北播三大祭りの一つと言われており、有名である。この祭りでは氏子でなくても屋台をかつぐなどの形で祭りに参加できるため新住民の参加も可能である。参加条件が緩くなることによって様々な立場の人の参加が可能になることは、祭りの中の「集団で関わる」を満たしているといえる。同じ時間を共有することで普段は接点がない人の間にも一体感が生まれる。その一体感は祭りが行われる佐保神社周辺に広がり、祭りが成立するのである。また見物人を多く集める工夫もされており様々な形での祭りとの関わりがもてる。また佐保神社周辺は昔から多くの人々が行き交い、商業も発展してきた。このことをふまえれば、昔から変化する町であるといえる。佐保神社の秋祭りに関しても、その時その時生活する人に沿った形で祭りが行われてきたと考えられる。それが佐保神社の秋祭りという伝統文化となっている。つまり古くから続いている氏子制度や習慣にこだわらず常に変化に対応した祭りを行うことで多くの人が参加でき、その結果祭りが発展したといえる。旧住民と新住民が「語り手」・「聞き手」という構図の中に組みこまれており、文化伝承の形態ができあがっている。

### 3. おわりに

図 3 は社町における文化伝承の仕組みを表したものである。祭りに着目した時に「まつり」と「祭礼」に分類でき、それぞれの事例として、家原地区の祭り、佐保神社の秋祭りを挙げた。そして人の関わりをみると、家原地区では、旧住民と新住民との関わりは必要最低限の部分しかなく、祭りの部分においての関わりはない。地区の半数を占める新住民に地区の伝統的な祭りが伝わっていないということは家原地区の祭りは衰退に向かっていると考えられる。一方佐保神社の秋祭りでは見物人という参加、当日だけの参加というような気軽な参加ができるため、新住民と旧住民との関わりがなされている。新住民が関わりやすいように祭りのあり方も時によって変化をしている。しかし、変化することでそこに暮らす人々の多くに祭りの文化が伝承されることになり、結果として伝統文化を維持することができると考えられる。

このように社町は、一見伝統文化が強く残っているような印象をもつが、家原地区のように昔のままの文化であるがために文化伝承の衰退が懸念される面、佐保神社の秋祭りのように気軽に参加できることによって文化伝承の維持につながる面という 2 つの特性をもっている地域ということができる。

これらのことをふまえて社町における祭りのあり方を示すとすれば、まず、神社という社町を表すものを用いて祭りが展開されるべきであろう。神社に関わるとなると様々なきまりや風習があり、新住民には近寄りがたいものである。社町は現に新住民の流入があるからこそ、ここまでの人口になり、発展もしてきた。新住民と共に社町という一つの集団を形成するには今までのものを受け入れやすいように変化させて提示する必要がある。このことは一見伝統文化を壊すようにみえるが、「語り手」としての旧住民から「聞き手」としての新住民に伝統文化が伝承され、伝統文化の存続につながるのである。社町にはまだまだ多くの伝統文化があるだろう。しかしいつか衰退してしまう危険性を持っているものもある。その伝統文化が新住民にも広がり新住民、旧住民という分け方が無くなる時こそ本来の集団形成が行われ、祭りをとおしてより深くつながりができるだろう。

表1 神社一覧表

| | 鎮座地 | 社格 | 神社名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 社 | 県社 | 佐保神社 |
| | | 村社 | 山氏神社 |
| | | 無格社 | 若宮神社 |
| | | | 八坂神社 |
| 2 | 山国 | 無格社 | 熊野神社 |
| | | | 加茂神社 |
| | | | 八坂神社 |
| 3 | 松尾 | 無格社 | 八幡神社 |
| 4 | 出水 | 無格社 | 大歳神社 |
| | | | 神明神社 |
| | | | 若宮神社 |
| 5 | 田中 | 無格社 | 厳島神社 |
| 6 | 鳥居 | 村社 | 神明神社 |
| 7 | 貝原 | 無格社 | 八幡神社 |
| | | | 稲荷神社 |
| | | | 神明神社 |
| 8 | 野村 | 無格社 | 大年神社 |
| | | | 大年神社 |
| | | | 八幡神社 |
| 9 | 西垂水 | 無格社 | 大歳神社 |
| | | | 御霊神社 |
| 10 | 窪田 | | |
| 11 | 家原 | 無格社 | 神明神社 |
| | | | 稲荷神社 |
| | | | 大歳神社 |
| | | | 御霊神社 |

| | 鎮座地 | 社格 | 神社名 |
|---|---|---|---|
| 12 | 上中 | 無格社 | 八幡神社 |
| | | | 出雲神社 |
| | | | 猿田彦神社 |
| 13 | 梶原 | 無格社 | 新宮神社 |
| | | | 大年神社 |
| 14 | 喜田 | 無格社 | 大年神社 |
| 15 | 沢部 | 無格社 | 大歳神社 |
| 16 | 福吉 | 無格社 | 大歳神社 |
| 17 | 上田 | 村社 | 大芋神社 |
| 18 | 大門 | 村社 | 若宮神社 |
| | | 無格社 | 八幡神社 |
| | | | 大歳神社 |
| | | | 天満神社 |
| | | | 恵比須神社 |
| 19 | 西古瀬 | 無格社 | 大歳神社 |
| 20 | 中古瀬 | 無格社 | 八幡神社 |
| 21 | 東古瀬 | 無格社 | 大日神社 |
| 22 | 屋度 | 無格社 | 大年神社 |
| 23 | 東実 | 郷社 | 佐保神社 |
| | | 無格社 | 熊野権現神社 |
| 24 | 畑 | 村社 | 住吉神社 |
| 25 | 廻渕 | 無格社 | 大歳神社 |
| 26 | 池之内 | 村社 | 住吉神社 |
| 27 | 上久米 | | |
| 28 | 下久米 | 村社 | 住吉神社 |
| 29 | 久米 | 村社 | 住吉神社 |

| | 鎮座地 | 社格 | 神社名 |
|---|---|---|---|
| 30 | 上三草 | 村社 | 住吉神社 |
| | | 無格社 | 稲荷神社 |
| 31 | 下三草 | 無格社 | 八幡神社 |
| 32 | 木梨 | 無格社 | 八坂神社 |
| 33 | 藤田 | 郷社 | 木梨神社 |
| 34 | 山口 | 無格社 | 大歳神社 |
| 35 | 馬瀬 | 村社 | 住吉神社 |
| 36 | 牧野 | 村社 | 住吉神社 |
| 37 | 吉馬 | | |
| 38 | 上鴨川 | 村社 | 住吉神社 |
| 39 | 下鴨川 | 村社 | 住吉神社 |
| 40 | 平木 | 村社 | 八幡神社 |

出所：兵庫県神職会（1938）『兵庫県神社誌』，加東郡教育会（1973）『加東郡誌』，
下中直人（1999）『兵庫県の地名』，平凡社より本人作成

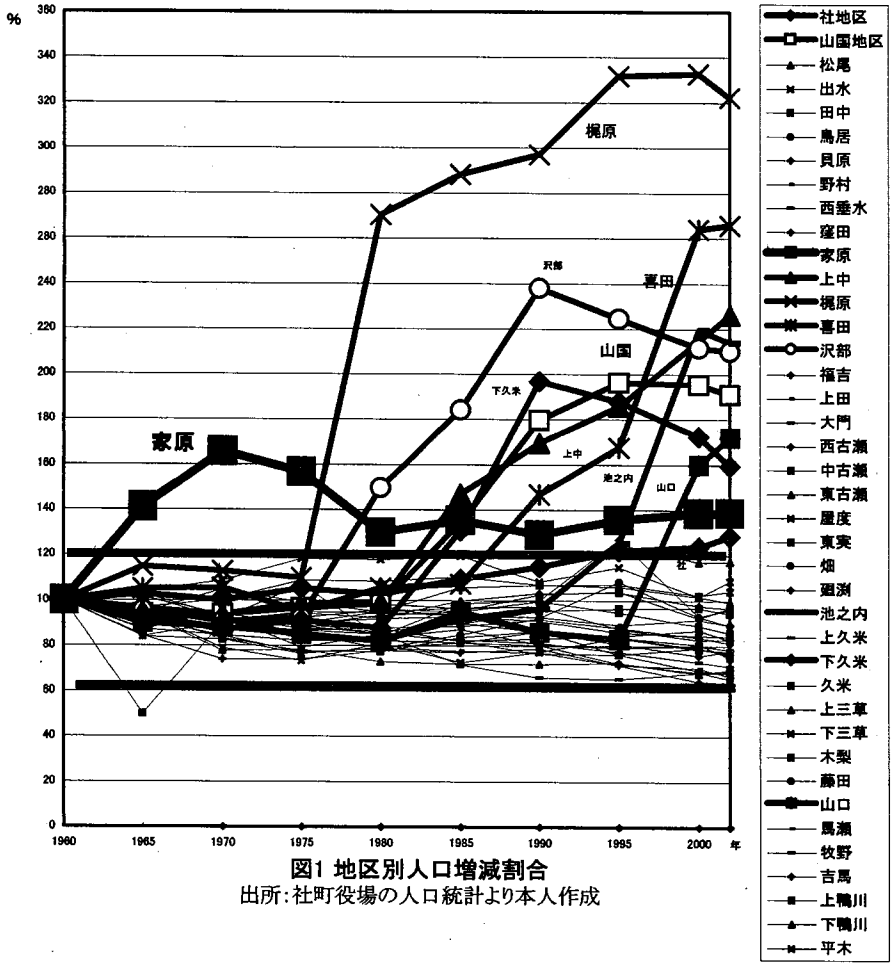


図1 地区別人口増減割合
出所:社町役場の人口統計より本人作成

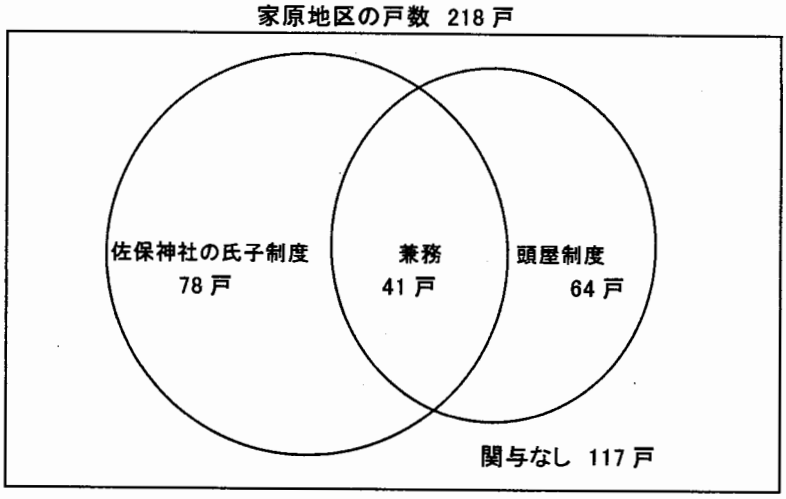


図 2 家原地区の神社との関わりを示した図
出所:聞き取り調査をもとに本人作成

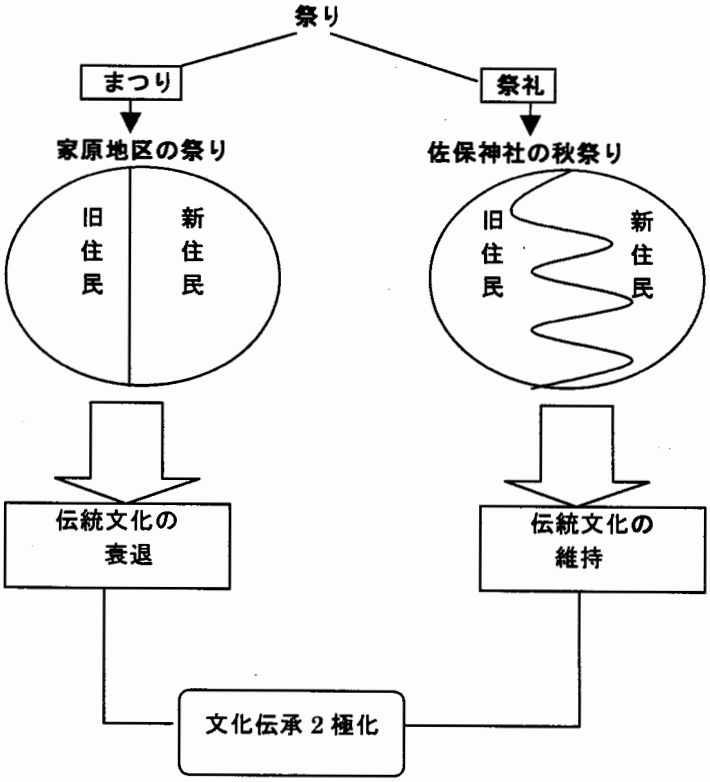


図 3 社町における文化伝承形態
出所:本人作成

**【参考文献・資料】**


加東郡教育会（1973）:『加東郡誌』，臨川書店，1441p.

角川春樹（1987）:『角川日本地名大辞典』，角川書店，pp. 2004～2008

川口謙二（1993）:『日本神祇由来辞典』，柏書房，510p.

神崎　寿景（1922）:『佐保神社誌』，臨川書店，232p.

倉林正次・桜井徳太郎・谷川健一・戸井田道三・山口昌男・山折哲雄（1986）:『人生祭事』，ミサワホーム総合研究所，323p.

佐藤照雄（1981）:『季刊　地域文化研究　秋 1981』，地域文化研究会，pp. 36～38

真野俊和(2001）:『日本の祭りを読み解く』，吉川弘文館，pp. 84～86

総務庁統計局（1985）『国勢調査集大成　人口統計総覧』，東洋経済新報社，1069p.

総務省統計局（2001）『統計でみる市区町村のすがた 2002』，日本統計協会，444p.

鶴岡静夫（1993）:『神社の歴史的研究 - 神信仰の変遷 - 』，国書刊行会，386p.

兵庫県知事公室統計課（2000）:『兵庫県市町別主要統計指標』，132p.

松平誠（1990）:『都市祝祭の社会学』，有斐閣，398p.

宮田登（1983）:『日本民族文化体系　第四巻　神と仏 - 民族宗教の諸相 - 』，小学館 463p.

森田三郎（1990）:『祭りの文化人類学』，世界思想社，191p.

社町（1990）:『新・社町制 35 周年記念誌　社町のまちづくり』，122p.

社町（2000）:『社町総合計画後期基本計画』，92p.

柳田国男（1990）:『柳田国男全集　13』，築摩書房，737p.

吉田省三（1971）:『宮だち』，社町中央公民館，44p.